

## 4/9 『イエスを十字架につけた人たち』(マルコ15:1~15)

長谷川 望 牧師

\*主イエスが十字架にかかられた日を Good Friday (良い金曜日) という。どうして「良い日」なのか。私たちの「救い」の根本がここにあるからである。マルコの福音書では11章から15章まで、多くの紙面をさいて十字架直前の一週間のできごとが扱われている。多くの人が十字架にかかわっていたことがわかるが、一体誰が十字架につけたのか。イエスに死刑にあたる罪は見いだせないといったが結局群衆を恐れた最高責任者ポンテオ・ピラト。祭司長・長老・律法学者などの支配者階級の者たちは最初からイエスを殺したいと思っていた。群衆は彼らに扇動されて「十字架につけろ」と叫んだ。イスカリオテのユダはイエスを裏切って引き渡した。ペテロは3度イエスを知らないと言ったが、他の弟子たちは逃げてしまっていた。イエスをあざけり実際に十字架につける作業をした兵士たち。何もしないで見ていた傍観者たち、、、、

\*「だが、ピラトは彼らに、『あの人がどんな悪い事をしたというのか』と言った。しかし、彼らはますます激しく『十字架につけろ』と叫んだ。(マルコ15:14)

イエスを十字架につけた者はもう一人ここにいる。私自身である。あなた自身である。「十字架につけろ」と叫んだ中に私がいる。私たちは一人残らず罪人である。罪人というのは、イエスを神と認めない、救い主と認めない、いや認めてもイエスから離れようとする者のことである。「罪」とは元々「的はずれ」という意味である。「的」は「神」である。私たちは神に創られ、神に愛されている。神に向かい、神のことばを守り、神中心に生きなければならないのに、できない。「隣人を愛しなさい」といわれてもなかなかできない。自己中心が罪のあらわれである。

\*実はイエスを十字架につけた真「犯人」は父なる神なのである。イエスから700年以上も前に書かれたイザヤ書にはイエスが苦難のしもべとして描かれている。「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」(イザヤ53:6) 神は人間の不正、不義、不信仰を放置しておくわけにはいかない。怒りがますます募って来る。そこで、全く罪のない御子イエス・キリストを十字架につけ、贖い(身代わり)の死によって、それを信じる者に救いを与えてくださったのである。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(Iヨハネ4:9~10)